序

賀川俊彦先生は、一九五五年四月に法学部助手に就任されて以来、四〇年にわたりラテン・アメリカ政治の研究と教育に従事され、一九九五年三月をもって定年退職された。私は、先生と同じ法学部政治学科地域研究グループに属している関係上、後輩として常日頃より先生と親しく接してきた。先生とのいろいろな想い出のなかで、先生の書かれた一つの新聞記事が強い印象として私の心のなかに残っている。

今ここに、一九六五年七月三日の『朝日新聞』夕刊に掲載された、「消された？　良心の声」と題する先生の文章がある。この文章には二つのことが書かれている。一つは、当時の若い人々の間で地域研究、特にラテン・アメリカ研究に対する関心が増大してきていることを喜び、地域研究の構築の必要性を語っておられることである。そこには、新進気鋭の地域研究者の情熱を見出すことができる。いま一つは、スタンフォード大学ラテン・アメリカ研究所の月刊誌『ヒスパニック・アメリカン・レポート』の廃刊を批判されていることである。「それは米国のたび重なる対ラテン・アメリカ政策の失敗に対して米国の良心の声を代表するものであった」。先生は、大規模な建設資金導入のために政府に批判的な雑誌を廃刊に追い込んだ大学当局の姿勢を批判し、地域研究における学問の自由を主張されている。ここに、若き日の賀川先生の姿がある。私はこの印象を大切にしたいと思う。

賀川俊彦先生は、我が国のラテン・アメリカ政治研究における先駆者の一人である。先生はラテン・アメリカ政経学会の設立に貢献され、過去四〇余年にわたりこの地域の政治的発展過程を分析されてきた。

賀川先生はラテン・アメリカ政治の特徴を、インカ帝国の法と政治など、その植民地時代以前にまで遡って分析さ

れる一方で、植民地時代の王権のあり方、革命の特徴、独立後の政治運動や軍部の政治的役割、ナショナリズムの展開、さらには冷戦下ラテン・アメリカにおける共産主義運動の様相などのきわめて今日的問題にいたるまで、時代を問わず研究を重ねられてきた。深く歴史的背景と政治的伝統を重視しながら、ラテン・アメリカの政治的特質を抽出するのが、先生の学風であった。

また、ラテン・アメリカ諸国共通の特徴を摘出しようとした研究と同時に、国際連合との関係を論じた論考や、メキシコやウルグアイなど個々の国に深く立ち入った研究も発表されてきた。扱う時代だけでなく地域的広がりという面でも、先生は先駆者としての面目を遺憾なく発揮されてきたのである。

賀川先生は、一九六一年と七八年に米国、ラテン・アメリカ諸国を長期にわたって訪問され、研究を重ねられた。研究成果とともに、みずからの足でラテン・アメリカ諸国を回られた体験を盛り込まれた講義は、学生に遠いラテン・アメリカ諸国を身近に感じさせるものであったという。

政治学科の賀川研究会はラテン・アメリカ政治を専攻する研究会として、すでに発足以来三二期にわたり、五〇〇名近くの門下生を世に送り出している。また先生は、学生時代馬術部に属し、教員となってからは学生の馬術愛好会の会長を務められた。

このような賀川先生が定年で去られる淋しさは禁じえない。今後とも健やかにご研究を続けていかれることを願うしだいである。

一九九五年一〇月

法学部長　山田辰雄